

大 豆

大豆病害虫防除対策推進事項

- (1) 種子伝染性病害が重要である。種子更新及び良質種子の選定を推進するとともに、紫斑病に対しては種子消毒の徹底を図る。
- (2) 播種・発芽時におけるドバトの被害を防止し、株数の確保を図る。
- (3) 葉焼病・べと病などの病害、ハスモンヨトウ・ミツモンキンウワバなどの食葉性害虫、カメムシ類・ダイズサヤタマバエなどの子実害虫については、適期防除を推進することにより増収を図る。

紫 斑 病 *Cercospora kikuchii*

I 防除の狙い 発芽時から収穫期まで、葉、茎、さや、子実に発生する。病原菌は罹病種子、被害植物で越冬し、種子が発芽すると子葉を侵し、生じた病斑上の胞子が飛散してまん延する。結実期に多雨・冷涼な天候が続いた場合に多発しやすい。種子消毒が大切で、落花期～幼莢期の薬剤散布により翌年の発生をかなり防ぐことができる。

II 防 除 法

1. 無病種子を用いる。
2. 病茎葉は集めて処分する。
3. 被害発生地では、深耕して表土を土中深く鋤き込む。
4. 種子消毒
薬剤防除一覧表参照
5. 薬剤散布
落花直後から幼莢期に葉焼病に準じて1～2回散布する。
薬剤防除一覧表参照

白 絹 病 *Sclerotium rolfsii*

I 防除の狙い 伝染源は土壤中の菌核であり、高温多湿条件下で発生しやすい。転換畑や汎用水田では畦畔部分から発生が広がる。連作により発病が増加する。発病した場合は、早目に抜き取り跡地及び周辺を消毒する。

II 防 除 法

1. 連作を避ける。
2. 密植や過繁茂を避ける。
3. 播種前に消石灰を10a当たり150～200kg散布する。
4. 深耕を行い菌核を土中深く埋没させる。
5. 病株は土と一緒に取り除き処分する。

べ と 病 *Peronospora manshurica*

I 防除の狙い 密植・多肥栽培によって過繁茂になると通風が悪くなるため発病しやすい。また、降雨の後に発生が多い。病原菌は卵胞子の形で病植物の組織内で越冬し、これが翌年の伝染源になると考えられるので、病植物の処分を行い、なるべく連作を避ける。

II 防 除 法

1. 過繁茂にならないよう肥培管理に留意する。
2. 連作を避ける。
3. 病植物は集めて処分する。
4. 薬剤散布
薬剤防除一覧表参照

葉 焼 病 *Xanthomonas campestris* pv. *glycines*

I 防除の狙い 開花期頃から収穫直前まで主に葉に発生し、風雨によって蔓延する。病原細菌は茎葉の被害部、種実で越冬し、翌年の伝染源となる。まれに莢にも発生し、又、いんげん、小豆も侵す。

II 防 除 法

1. 病茎葉は集めて処分する。
2. 連作を避け、2年以上他作物を栽培する。
3. 耐病性品種を選ぶ。
4. 薬剤散布
発病を見たら直ちに散布する。
薬剤防除一覧表参照

<葉焼病品種耐病性>

	強	中	弱
秋大豆		フクユタカ	

モザイク病

I 防除の狙い ダイズモザイクウイルス、アルファルファモザイクウイルスなど数種があるが、九州地域ではダイズモザイクウイルスの被害が大きい。この両ウイルスは汁液伝染のほか、アブラムシ（モモアカアブラムシ、ダイズアブラムシなど）によって媒介される。大豆のウイルスは種子伝染するものが多い。

II 防除法

1. 無病種子を用いる。
2. 発病初期に病植物を抜き取り処分する。
3. アブラムシの防除を徹底する。
4. 耐病性品種を選ぶ。
5. 薬剤散布

大豆のアブラムシ類の項参照。

<モザイク病品種耐病性>

	強	中	弱
秋大豆		フクユタカ	

ハスモンヨトウ

I 防除の狙い 大豆の葉に産み付けられた卵塊からふ化した幼虫が集団で葉肉だけを食害し、被害葉は白変する。幼虫は発育が進むにつれて分散して食害するので、白変葉を認めたらすぐに防除する。夏大豆では殆ど発生しないが、秋大豆では9月以降発生が多い。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

ミツモンキンウワバ

I 防除の狙い 夏大豆、秋大豆ともに発生するが、秋大豆に多い。発生量は年次変動が大きく、年により異常発生することがある。成虫は、葉裏に単粒で産卵する。幼虫にはほとんど毛がなく、一様に淡黄緑色で、腹部末端部のほうが大きく、腹脚は二対で、しゃくとり状に歩行する。若齢幼虫は多数群棲することはなく、白変葉を生ずることはない。葉裏を丹念に調査し、早期発見に努める。

カメムシ類

I 防除の狙い アオクサカメムシ、ミナミアオカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、マルカメムシが加害の主体で、年2回～4回発生し、莢の被害が極めて大きい。

若い莢が加害されると落下するものが多いが、肥大期に吸汁されると子実の稔実が悪く、くず豆が多くなる。したがって、薬剤散布は稚莢期から肥大期にかけて2～3回行う。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

アブラムシ類

I 防除の狙い 大豆に加害するアブラムシの種類は多いが、密度が高く実害がみられるのは、ダイズアブラムシ、マメアブラムシである。密度増加は急激であり、多発の傾向がみられたら早目に防除する。一部のウイルスはアブラムシで媒介されるので注意する。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

マメハンミョウ

- I 防除の狙い 年1回7月中旬から9月中旬まで成虫が現れ、葉と花房をむさぼり食う。局部的に多発生し、群棲して加害する。被害が進むと群がって移動食害する。

コガネムシ類

- I 防除の狙い 5月下旬から8月下旬にかけて、ヒメコガネ、マメコガネ、ドウガネブイブイの成虫が葉を網目状に食害する。ヒメコガネ、ドウガネブイブイは日中は葉裏または土中に潜み、夜間活動して摂食するが、異常発生すると日中も暴食する。

防除は被害初期に1～2回散布するが、飛来の多い場合は1回の散布では不十分である。

秋大豆では時として、生育中期に幼虫が根部を食害し、枯死することがあるが、これらコガネムシの大部分は7～8月に産卵されるので、幼虫発生が予測される時は播種時に施薬する。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

ダイズサヤタマバエ

- I 防除の狙い 夏大豆、秋大豆ともに加害する。成虫は開花期から落花期にかけて最も多く飛来し、子房または若い莢に産卵し、幼虫が子実を加害する。被害莢は、奇形となる。夏大豆ではできるだけ早播きして、6月末までに開花を終わるようにすると被害をある程度回避できる。薬剤による場合は開花最盛期を中心に1～2回散布する。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

シロイチモジマダラメイガ

- I 防除の狙い 第2世代幼虫が夏大豆に、第3～4世代幼虫が秋大豆に加害するが、8月下旬～9月の被害が最も大きい。したがって夏大豆は遅播き程被害を受けやすい。被害は不稔莢や虫食い豆となるが、その発生量は年次変動が甚だしい。防除は稚莢期中心に行う。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

マメシンクイガ

- I 防除の狙い 年1回発生し、8月上旬から9月上旬にわたって成虫が現れ、主として落花後間もない若い莢に産卵する。幼虫は子実をかじって成長し、被害莢内に虫糞を満たす習性がある。本種は秋大豆に多く、早播きしたもの程多い。産卵期と開花期が一致したときに被害が多い。

ネキリムシ類

- I 防除の狙い 発芽後間もない時期に根際を切断する。老齢幼虫は数株連続して加害するので、早期発見に努め、幼虫を捕殺すると最も効果的である。

水田転換畑は湿り気が多く、雑草が生えやすい等、産卵に好適な条件となりやすいので注意する。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

タネバエ

- I 防除の狙い 発芽時に幼虫が子葉や胚を食害し、発芽障害を起こす。夏大豆を早播きすると特に被害が出やすい。

II 防除法

1. 薬剤散布

薬剤防除一覧表参照

センチュウ類

野菜・花き共通事項3の土壤消毒の項参照。